

市史だより Fukuoka

8



「福博名勝 官幣大社宮崎宮伏敵門」(福岡市博物館蔵絵葉書)

中世専門部会特集

このサインは誰のもの？

—宮崎宮関係の古文書の人名比定作業から—

第4回福岡市史講演会レポート

連載

コラム 歴史万華鏡
部会だより
福岡市史への歩み

このサインは誰のもの？

— 宮崎宮関係の古文書の人名比定作業から —



左の写真をご覧下さい。この古文書は福岡市東区の宮崎宮の宮司家であった田村家に伝来しているものです。その詳しい内容や古文書が出された背景は『福岡市博物館名品図録』三七頁をご参照ください。ここでは、文書の裏(紙背しほ)といえます)に据えられた二つの花押(今でいうサインのようなもの)に注目したいと思います。



▲「筑紫惟門寄進状」(田村文書・福岡市博物館寄託)

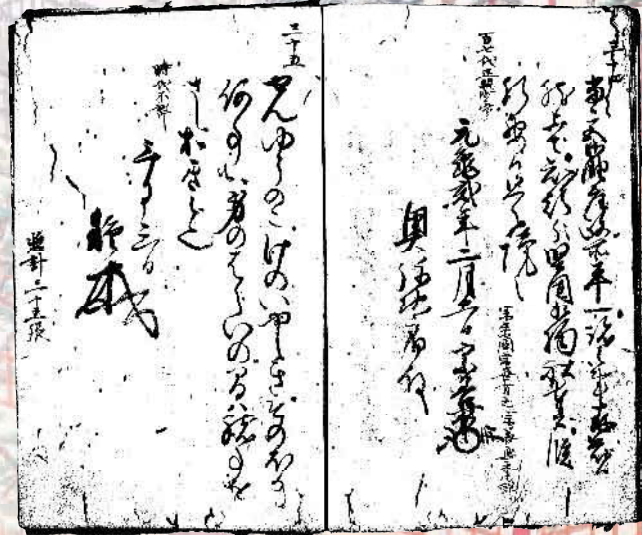
裏花押の人名比定

現在、市史編さん室では、『新修 福岡市史 資料編 中世I』の編集作業を進めています。その編集作業の中で、今回注目する「筑紫惟門寄進状」も収録対象

であるため、史料本文の翻刻、人名・地名比定作業を行っています。この文書を始め宮崎宮の関係文書は、これまでに『宮崎宮史料』『宮崎宮史』などで翻刻掲載されていますが、この紙の裏にある花押(裏花押といえます)二つに關してまったく人名比定がされていません。裏花押は、文書の表に書かれた内容に關して、その関係者が証明する・効力を持たせる意味で据えられるわけで、重要な意味を持っています。刊行予定の資料編では、この裏花押の人名比定をしたいと思い、情報を探していたのですが、容易に見つかりませんでした。

関連文書の発見

平成二十(二〇〇八)年三月頃に宮崎宮の所蔵史料の調査を行った後、その中に含まれている「御油座文書写」のデータを整理していたある日、一つの文書に目とまりました。それは、同文書写の三五通目にある「宗善書状写」という文書です。その下に据えられた花押を見ていて、どこかで見たとある形だと思いました。そこで、以前から気になっていた「筑紫惟門寄進状」の写真を見直して、その裏花押の一つと一致することが分かりました。その二つの花押は左頁の通りです。



▲「宗善書状写」(青柳種信関係資料(山崎家資料)福岡市博物館蔵)

▼ 田村文書の裏花押



宗善書状写の花押 ▲

【背景】 笹崎八幡宮縁起 下巻

(至町期社頭図) 笹崎宮蔵

さて、そうになると、今度は「宗善」という人物が何者なのか気になります。まずは、「宗善書状写」の内容を詳しく見てみましょう。

【釈文】

当宮御油座政所平一跡之事、存知候、然上者、知行分堅固相拘、社奉公段肝要候、恐々謹言、

元龜貳年二月十一日 宗善(花押影)

奥弥次郎殿

※元龜貳年(一五七二年)

【解釈】

当宮(笹崎宮)御油座(を管理する)政所の平氏の跡目(をあなたが相続すること)は了解しました。そうであるからには、知行している分をしっかりと保有し、(笹崎宮へ)奉公するのが大切です。恐れながら謹んで申し上げます。

この内容から、宗善は①笹崎宮の関係者、もしくは②笹崎宮や笹崎津などを管轄する大名(元龜二年当時は大友氏)の関係者と推測できます。彼の発給文書は右の文書しかありませんでした。そこで彼の出自について推測を重ねると、①の場合、笹崎宮を代表する人物として、大宮司と座主がおり、この時期は大宮司は田村弘重もしくは重昌、座主は五智輪院麟

清と比定できますが、彼らの花押も残されておらず、確認することができません。

一方、②の場合、堀本一繁氏によれば(同「戦国期博多の防御施設について」『房州堀』考)「福岡市博物館研究紀要」七、一九九七年)、当時の大友氏の博多支配のあり方は、博多津御取次吉弘宗弼―博多代官綾部玄蕃允理昌であったとされませんが、両者の花押とも合致しませんでした。念のため志摩郡代(＝柑子岳城督)の臼杵新介鎮廣やその被官達の花押も確認しましたが、やはり該当する人物がいませんでした。

ここまで推理を重ねてきましたが、現段階では、永祿二(一五五九)年の寄進状に宗善という人物が裏花押の一つを据えていたということしか確定できませんでした。戦国時代の博多や笹崎津に関する史料は、度重なる戦乱で失われたものが多く、まだまだ断片的なことしか分かっていません。一人の人物の比定をするのにも結構苦労することが多いのです。今回刊行予定の『資料編 中世Ⅰ』でも、試行錯誤しながら編集作業を進めているところですが、『資料編 中世Ⅰ』を見かけたら、ぜひ「筑紫惟門寄進状」と「宗善書状写」の人名比定を確認してください。ひよっとしたら今回の答えが載っているかもしれません。

御家騒動と家臣団

黒田武士の主従意識

日時 平成二十年八月三十日(土)

午後二〜五時

会場 福岡市立中央市民センター

三階ホール



第四回市史講演会を平成二十年八月三十日に中央市民センターで開催しました。開演時間には五〇〇席が満席となり、市史編さん室一同、たくさんの方々にうれしい悲鳴をあげた反面ご入場できなかった方には大変申し訳ない気持ちでいっぱいです。当日足を運んでいただいたみなさんに、心よりお礼を申し上げます。今回は「御家騒動と家臣団―黒田武士の主従意識―」をテーマに、二つの講演とシンポジウムをおこないました。

講演

黒田騒動と家臣団の形成

まずは九州産業大学教授の福田千鶴先生に、黒田騒動(二代藩主黒田忠之とその重臣栗山大膳の対立による福岡藩の御家騒動)の背景について、黒田氏の家臣団の成り立ちという観点からお話しいただきました。上方の小さな武将(赤松氏一族の小寺氏の家臣)から身を起し、譜代の家臣を持たなかった黒田氏は、自分の子飼いの家臣を家老に取り立てることで強固な家臣団を形成していったのだそうです。長政のあとを継いだ忠之もこの先例の通りって倉八十八太夫を取り立てたのですが、世の中

福田 千鶴先生



は関ヶ原合戦から三〇年も経ち、領地が固定した平和な時代。新たな重臣が登場することは、先代のもとで多くの領地を得ていた家臣にとっては、自領が減らされる危険を意味します。栗山大膳はそのような危機感のなか、忠之との対立を深めたところ福田先生は分析されます。黒田流の家臣団の形成過程を検証することで、黒田氏の御家を守るためであったというこれまでの黒田騒動の解釈に、再考を迫った講演でした。

講演

鍋島騒動と『葉隠』

次に九州大学教授の高野信治先生に、佐賀藩の鍋島氏の家臣について、黒田二十四騎(草創期の黒田家を支えた二四人の家臣たち)と比較しながらお話しいただきました。肥前の支配は戦国時代に活躍した竜造

寺氏から、その家臣団の一つであった鍋島氏に受け継がれていきました。そのため古くからの家臣たちは、あくまで肥前の領主は竜造寺氏であり、その意向によって鍋島氏は大名になったと考えていたようです。このような家臣にあつては、黒田二十四騎のように、鍋島氏の譜代家臣を統一するよいうな表現は生まれにくかったという高野先生のお話に納得です。佐賀藩の有名な書物である『葉隠』は、「鍋島侍」はたとえ主君が自分の器量を正当に見てくれなくても、主君を思い続けなければならないとうたっています。しかしこれは、鍋島氏の家臣が強固なものではなかったがゆえに、その裏返しとして理想的な「鍋島侍」像が描き出されたものだと言われます。鍋島氏と比較していただいたことで、黒田二十四騎の特徴がより明確になりました。

高野 信治先生



歴史万華鏡

おお やすみ やま

大休山と南公園

福岡市域を一望できる場所の一つに、福岡市中央区の、標高60メートルの展望台を持つ大休山一帯に作られた南公園があります。

南公園展望台より博多湾をのぞむ



大休山は、福岡城のある赤坂山の丘陵から南に続く丘陵で、名前の由来は、江戸時代の『筑前名所図会』によると、古くは福岡から南へ抜けるための峠道で、途中で人々が一休みする場所だったことによるといわれ、頂上付近は城下の一望できる絶景の場所とされました。

またこの地は、享保17(1732)年の大飢饉の時に、南部の村々から、福岡城下での救いを求め



▲南公園内の飢人供養墓

て行く途中で餓死した人々のための、供養墓や地蔵などがあり、明治10(1877)年の福岡の変では、福岡城攻撃をあきらめ、追撃する政府軍のがれて南部へ移動する士族反乱軍の集結地になりました。現在の南公園一帯は、平尾浄水場跡地も合わせて昭和55(1980)年に開園した福岡市動植物園と、その北の静かな森林散策コースからなります。

柴多 一雄先生



江藤 彰彦先生



シンポジウム 近世大名黒田家と家臣団

引き続き、講演いただいた先生に加えて、久留米大学教授の江藤彰彦先生にも参加いただき、シンポジウムを開きました。司会しました。黒田氏と鍋島氏の事例を比較することで黒田二十四騎の特徴がさらに明らかになるなか、江藤先生には新たに御家騒動の時代背景について問題を提起していただきました。全国で御家騒動が頻発する時期は諸藩の財政が悪くなっていく頃でした。主君、家臣ともに年貢を増やそうと新田の

開発をおこなうのですが、新田は開発した者の収入となってしまうため、両者の間で経済的な摩擦がおこったのだそうです。主君は家臣の新田開発を差し止めたり、領地経営に積極的に介入したようです。御家騒動の背景には、政治的な事情だけではなく、このような限られた資源を奪い合わねばならない社会的な問題があったという先生のご指摘は、大変興味深いものでした。また江藤先生は、主従意識は武士だけではなく町人や農民にもあつて、それがどのように形作られ、社会のなかで確認されていたのかも考える必要があると言われました。武士だけでなく、藩はそれぞれの立場での主

従意識が重なり合いながら維持されていたことを知ることができました。

福岡市史では福岡藩の藩政や家臣団に関する資料集を企画しています。ますます明らかになる黒田武士の姿にご期待下さい。

講演会の詳しい内容は、今年度末に発行予定の『市史研究 ふくおか』第4号でご覧いただけます。

部会だより

考古

西区姪浜駅めいばやしから、北西方向へほんやりと歩くこと二〇分、こんもりとした木立と夕映えの海が目飛び込んできました。ここ「小戸公園」を訪れたのは、公園の一角にひっそりと遺る古墳の見学をするためです。



小戸公園から今津湾を望む

この古墳、九州大学が調査した古時昭和二十六年は小戸古墳と呼ばれていました。その後、近くに他の古墳があることがわかったので、現在は「小戸古墳群」の一つとして扱われています。

さて、ここから見つかった須恵器やアクセサリー、武器などは、調査成果として九州大学の研究室に保管されました。これまで、なかなか発表できませんでした。『資料編 考古3』(平成二十二年度刊行)に掲載することが決定し、再調査が始まっています。

見つかった品々の再整理と実測、行方不明になつていった当時の測量図面の発見、そこから導き出される分析などで、当時分からなかったものの達の輪郭が見えてきました。未発表資料の公開に、ご期待ください！



▲石室(写真提供/辻田淳一郎氏)

古代

有田遺跡ありたの発掘調査現場を見学してきました。有田遺跡は福岡市早良区有田・小田部こたべ一帯に広がる遺跡で、これまで多くの調査が積み重ねられていす。いろいろな時代の様子がわかる遺跡ですが、古代に関わるものとしては、まず六世紀(古墳時代)の遺構があります。三本の柱を組み合わせた柱列で区画された内側には、総柱建物群が見つかっています。この柱列の形は博多区の比恵遺跡でも確認されており、ヤマト政権の「ミヤケ」に関わる施設とも考えられています。小田部の地名からも田地経営に関わる「田部」の存在がうかがえます。また、七世紀後半から八世紀にかけての早良郡衙くわんがの郡跡くわんじ(郡司が政務を執る役所の中核)や、正倉跡(税として徴収した米を蓄



積するクコ)が確認されています。近くには当時の道路跡と思われる溝も検出されており、郡衙が交通上重要な位置に立地していた事が知られます。「ミヤケ」から「評」を経て「郡」へと大きく移り変わっていく古代の地方支配のあり方を追ううえで、大変重要な遺跡です。古代専門部会では、これらの新しい発掘調査による知見を取り入れながら、福岡市域の古代像を描いていきたいと思つていきます。

中世

資料編中世1の編集作業が続いています。これまでに必要な資料調査の約九〇%を終えることができました。これも史料所蔵者・機関のご協力のおかげと感謝しております。

今号の特集記事と関連して、花押にちなんだ別の話。次の花押もこれまでの研究では誰のものか分かっていません。青木文書の中に同じ花押のある文書が二通あり、①永正一一(一五一四)年九月三日付で青木六郎に「右京亮」という官途を与える、②永正二二年閏二月三日付で、青木右京亮に肥前国養父郡家嶋庄内十町



▲青木文書の花押



▲少式資元の花押
横岳文書・永正3年8月7日

の知行を安堵するといふものです。この花押を使う人物の心当たりとして、大内義興(筑前守護)、渋川尹繁(九州探題)、少式資元の花押を確認しましたが、知られている花押の中ではどれも該当しませんでした。特に②の内容に注目すると、肥前国養父郡内の土地を与えるといふものなので、当時、肥前国神崎郡勢福寺城を拠点に東肥前を支配下に置き、筑前国を狙っていた少式資元が、文書の作成者としてもっともふさわしいように思えます。そう思つて見てみると、花押の形も少し似ているように思えますが、皆さんはどう思われますか？

部会だより

近世

現在近世専門部会では、資料編の刊行に向けて、武家資料を中心に調査・収集を行っております。これまで

は公共機関収蔵の史料を中心に作業を進めてきましたが、昨年度からは個人の方が所蔵されている資料についても調査・収集を進めています。

今年の八月から十月にかけて、松崎文書館所蔵「藤井文書」の調査・撮影を行いました。藤井家は慶長期に仕え始め、近世を通して大組として福岡藩に仕えた家です。「藤井文書」は、福岡市博物館所蔵の「藤井家資料」と本来同じ資料群であったものです。含まれている文書は近世初期から明治にかけてのもですが、博物館蔵のものには見られない系図類、彦根藩井伊家の家来であった佐成家よりの私信の他、近世期の書状、明治期の地券や土地関係の書類が多く含まれ、

博物館蔵のものと同合わせていくことで、藤井家について多くのことが明らかに出来ると思われま。

この様に個々の家の資料調査が進むことで、いろいろなことが分かってきます。それにより、これまでと違った近世の福岡像を描き出すことが出来ます。近世部会では今後も色々な資料の調査・収集を進めていく予定です。



▲藤井文書の撮影

近現代

現在連載中の「福岡市史への歩み」をお楽しみいただいているでしょうか。

既に語られているように、福岡市史の編さんは大正年間より構想が立てられ、昭和一〇年代には刊行直前までこぎ着けていながら、時代の制約によって断念したという経緯があります。

その時期の記録を見ていると、官公庁の長を表にして並べているノートがありました。表はページごとに市長、市議を初めとする市の幹部、県知事など県幹部、さらには裁判所長、商工会議所会頭、博多駅長、歩兵連隊長などが福岡市にあった官公庁について、長の名前と就任離任年月日を手書きで記入されています。

後に刊行された「福岡市史明治編資料集」の「官公庁長官人名表」には、資料集刊行当時にはすでに機関として存在していない歩兵連隊長なども掲載されているところから、「人名表」を作成するにあたって、この古いノートが大いに参考になったものと考えられます。(明治編資料集については広報誌第2号でも紹介しました)

現在は情報が多く、検索能力も向上の一途をたどっていますが、手書きのノートが物語る「データベース」に思いをはせつつ、近現代部会では各種資料のデジタルデータ化を進めています。

民俗

特別編「福の民」暮らしのなかに技がある」に向けて、聞き取り調査を続けています。

町に長く暮らししている方々からお話をうかがいしていると、昭和の中・後期から今日にかけての町の変化について、よく耳にします。かつてあった商店や民家がマンションや商業ビルになり、近所の人と世間話をしてきた小路は拡張されて車の行き交う道路になり、といった変化です。都会の暮らしには変化がつきもので、民俗専門部会にとっても、こうした推移も含め今そこにある町を描くことは、重要な課題となっています。

そこでヒントになるのは、やはり人々のお話です。町の風景が変わっても、人々の暮らし方は見る影もなく一変してしまふような種類のものではなく、変化を受け入れながらも、一方では生活の中で育まれた知恵や技を受け継ぎながら営まれています。「昔はこうだったよ」「そういうえばあの時は…」という語りの中に、現在にも通じるような生きるための知恵が浮かび上がるとき、町の記憶は、ふだんは見えづらいい形でも息づいていて、人々の暮らし方をゆるやかに方向づけていることを、私たちに再確認させてくれます。



▲聞き取り調査の一例です。東区の「田中時計店」さんにお話をうかがいました。

福岡市史への歩み

福岡市博物館顧問 田坂 大藏

前回は、市制施行五十周年を記念した表彰式ほか一連の行事のほかに、昭和十四（一九三九）年三月に出版された『福岡市市制五十年史』が、内容的には、明治二十二年の市制発足以来の人事や行政全般に関する統計資料を編纂したものであったことを報告しました。

さて、現在うかがえる資料からは、戦時中の編纂室の動向はまったく不明と言わざるを得ないのは残念です。いろいろな雑誌に寄稿していた博覧強記の永島芳郎主任の小論も、残念ながらあまり見かけません。しかしながら、前述の『福岡市市制五十年史』がわずか六カ月で脱稿したことからも、各種の資料収集とその整理は、着実に継続されていたであろうことが容易に理解できます。収集整理された史料や図書類については、終戦間際に疎開したと伝えられています。戦後の混乱と、昭和二十三年永島主任の死去にともない、その多

くが行方不明になっています。

永島の後任として起用されたのは伊東尾四郎氏でした。

伊東氏は地方史研究者として定評のある人です。明治二（一八六九）年、宗像郡東郷（現宗像市）に生まれ、福岡中学校初等科、第一高等学校を経て、帝国文科大学国史学科を卒業、福岡県豊津尋常中学教諭を経て、県立小倉中学校校長を歴任しました。大正五（一九一六）年には福岡県立図書館長としてその創設に尽力し、一旦教職に戻ったのち、昭和五年には福岡県史料調査事務の嘱託となって、昭和二十四年に没するまでその任に従事しています。この時、不朽の名著となった『福岡県史資料』一二巻、『福岡県史料叢書』一



▲『福岡県史資料』

〇冊を
主著として、
主に北部九州
の市史、郡史
を多数手がけています。



▲『福岡県史料叢書』

福岡市はこれらの実績を高く評価して、市史編纂の嘱託に就任依頼を行い、市史編纂事業の充実を図ったものと思われませんが、その意に反して、高齢のためか、伊東氏は就任の翌年死去されました。

ただちに後任の人選が進められ、昭和二十五年三月、小野有耶介が嘱託として発令され、三カ月後には事務吏員に昇任、教育部社会教育課に所属（二十七年頃総務課に移管）して、新たに編纂事業に着手しました。しかし、前任者の不幸なども重なり、編纂室の収集史料や図書類は、散逸状態だったといわれています。